

下図記事に思うこと。

近頃、待つことの大事さを感じる人が多い。「待つ」ことは「する」ことに負けないくらい大事だ。簡単なことは、その場で片端から決めた方が良いが、新しいことや他人や組織などの協力を得なければならぬ場合は、急ぐと心労ばかり多くて、うまくいかない場合が多い。

まず、自分で容易にやれることは直ちにやっておく。後はもう少しましな自分の案や、他人の案や決断、協力を待つことになる。待つことに耐えることが必要なのだろう。待つて、やるべき肝心なことが見えて来てから、夢中でがんばる。特に、前日や当日は、逃げないで目を見開いて、事に当たる。そうすると、時間が有効に使えて効率があがるような気がする。

筆者は若い時、経験不足のため、「失敗したらどうしよう、嘲笑されたり軽蔑されたりすると恥ずかしい」と不安になった。だから、無理にでもすぐやって、心への負

気炎

待つ力

<山形新聞>

担を減らそうとしたが、つらいし、それほど、うまくいかない。

しかし、老いた現在では、「その日その日を楽しく暮らそう。まあ何とかなるだろう。たとえ、多少まずいことがあっても大したことない。誰も命まで持っていけない」などと思うようになった。

幕府瓦解の時分、万死の境で活躍した勝海舟は「真面目に修業した座禅と剣術とが、おれの土台となつて後年大そうためになった」と語っている。この鍛錬が彼の座右の銘の「余裕綽々」、そして、待つ力をつくつたように思える。

また、デザイナーの横尾忠則は「ぼくはいつも仕事の締め切りぎりぎりのところまでやってこなければ創作のアイデアは浮かばない。時間がなくなり身の危険を感じた時には、ある未知の巨きな力が味方してくれる」と語る。

人生は「すること」、「待つ」ことからできているのかもしれない。

(聴江 重)

2025年6月7日

投稿者の「すること」に対応する言葉として「鉄は熱い中に打て」「善は急げ」「思い立ったが吉日」が浮かんだ。

他方で「待つ」に対応する言葉として「急がば回れ」「慌てる乞食は貰いが少ない」「急いては事を仕損じる」が浮かんだ。

どちらの生き方が適切とか、得をするとかのことではない。世の中の万物・万象の自然原理は「陰中陽有り・陽中陰有り」で、際限なく陰陽巡り合うことから投稿者の人生は「すること」と、「待つ」ことから出来ているという捉え方は至極当然のこと、当り前のことである。

瞬時瞬間の「待機(判断)⇒進行⇒待機(判断)」を無限に積み重ねて今日の私があるということである。

(end)